

寺廃脇の宮

山田市文化財調査報告書 第1集

1985

山田市教育委員会

寺の脇の宮

山田市文化財調査報告書 第1集

序

国・県の補助を受け、山田市教育委員会が主体となって実施いたしました宮の脇廃寺発掘調査は、本市における本格的な文化財の調査としては、初めてのことであります。

本調査によって得ることのできました多くの出土品により、平安時代初期から後期にかけて存続した寺院跡であり、さらに火災にあったこと等が確認されました。残念なことに、基壇礎石建物が思わしくない残存状態でありましたが、重要な成果が得られ、本市にとっては貴重な文化財遺産といえます。そのようなことから本跡を調査前の姿で保存することとなり、これらの資料を後世に残すべく、この度調査報告書を刊行いたすこととなりました。この報告書が、本市の歴史を知る上で、貴重な資料となれば幸甚に存じます。

なお、末筆ながら本調査の実施にあたり県教育委員会文化課、県教育庁筑豊教育事務所ならびに九州歴史資料館をはじめ、地元関係者の方々に、多大の御理解・御協力をいただきましたことに対し、深く感謝申し上げる次第です。

昭和60年 3 月30日

山田市教育委員会

教育長 廣 瀬 和 生

例 言

1. 本書は、山田市教育委員会が昭和59年度に国、県の補助を得て、山田市大字熊ヶ畑字宮の脇2116に所在する寺院跡を発掘調査した報告書である。
2. 調査は、山田市教育委員会が主体となり、福岡県教育庁文化課・同筑豊教育事務所の援助を得て行うこととし、調査の実際は九州歴史資料館が当たった。
3. 遺構の実測は高倉洋彰、高橋章、平島文博が行い、遺物の実測は森田勉氏、遺構製図は豊福弥生氏の協力を得、他は高橋が行った。遺構・遺物写真は石丸洋氏による。遺物整理は県文化課岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館で実施した。
4. 本跡は従来『神宮寺跡』と称されてきたが、その経緯が明らかでなく、ここでは小字名をとって「宮の脇廃寺」とした。
5. 表紙題字は山田市教育委員会社会教育課矢本善邦氏による。
6. 本書の執筆はⅠ－井上裕弘、Ⅱ－上野馨、Ⅴ－Ⅰ－森田勉、Ⅶ－平島文博、他は高橋が行った。
7. 本書の編集は井上の協力を得て高橋が行った。

目 次

序

Ⅰ. はじめに	1
Ⅱ. 位置と環境	2
Ⅲ. 調査の経過	4
Ⅳ. 検出遺構	
1. 基壇礎石建物	4
2. 不明遺構	7
Ⅴ. 出土遺物	
1. 出土土器	7
2. 瓦 類	8
3. その他の遺物	10
Ⅵ. まとめ	13
Ⅶ. 付 編	
—古代嘉麻地方と山田市所在の宮の脇廃寺について—	

挿図目次

第1図	宮の脇廃寺周辺遺跡分布図	3
第2図	宮の脇廃寺地形図およびトレンチ配置図	5
第3図	S B 001実測図	6
第4図	S B 001東側石列実測図	6
第5図	S B 001階段状部断面図	7
第6図	表土・S X 002出土土器実測図	8
第7図	軒丸・軒平瓦拓影・実測図	9
第8図	平瓦拓影・実測図	11
第9図	平瓦・丸瓦・熨斗瓦拓影・実測図	12
第10図	山田市地形図	3

図版目次

図版1.	宮の脇廃寺遠景
図版2.	(上) 礎石建物S B 001全景(北東から) (下) 礎石建物S B 001全景(北から)
図版3.	(上) S B 001根石と東側石列(北から) (下) S B 001東側石列(南から)
図版4.	(上) S B 001階段状遺構(東から) (下) S B 001階段状遺構(北から)
図版5.	(上) Aトレンチ(南から) (下) Bトレンチ(北から)
図版6.	(上) Cトレンチ(東から) (下) Dトレンチ(西から)
図版7.	S B 001出土土器・軒先瓦
図版8.	S B 001出土丸・平瓦、熨斗瓦

I はじめに

本調査は、鉾害復旧事業に伴う土取工事により一部崩壊の恐れが生じたため実施した緊急発掘調査である。遺跡は福岡県山田市大字熊ヶ畑字宮の脇に所在する。この遺跡については、古くから平安時代の平瓦や丸瓦など多数の瓦が採集され、平安時代の寺院跡の存在が早くから指摘されていた。

昭和58年11月、山田市教育委員会より県教育庁筑豊教育事務所に、鉾害復旧の土取工事により宮の脇廃寺が崩壊する可能性がある旨連絡があった。それを受けて筑豊教育事務所では早速、現地踏査を行い、遺跡の重要性から土取工事を一時中止し、遺跡の範囲及び内容を知る緊急調査が必要であることを市教育委員会と地権者に申し入れた。その結果、昭和59年度の国庫補助事業により緊急発掘調査を実施し、それをもとに保存等の協議をすることとなった。

遺跡の重要性から調査にあたっては調査指導委員会を結成し、その指導のもとに発掘調査を実施することになった。

調査関係者は下記のとおりである。

発掘調査指導委員会		九州大学文化史研究所教授	横山 浩一
		九州芸術工科大学教授	沢村 仁
		北九州市立考古博物館長	小田富士雄
調査責任者	山田市教育委員会	教育長	廣瀬 和生
	同	社会教育課長	矢野 勝美
	同	社会教育係長	矢本 善邦
	同	主事	寺田 仁
調査担当者	福岡県教育庁文化課	調査第2係長	栗原 和彦
	福岡県教育庁筑豊教育事務所	技術主査	井上 裕弘
	九州歴史資料館	調査課長	石松 好雄
	同	主任技師	高橋 章
調査補助員			平島 博文

この他、九州歴史資料館副館長藤井功氏、県文化課技術主査大塚 健氏、九州歴史資料館技術主査高倉洋彰氏、同石丸洋氏の協力を得た。また、発掘作業にあたっては地元の方々、並びに整理作業については九州歴史資料館の方々の御協力を得た。記して謝意を表します。

発掘作業員

松岡準一・田原五郎・樋口成實・金崎栄七・原島勝利・遠矢政市・寺田 巧・廣瀬スズエ・平嶋みゆき・笹尾モモエ・上野富美子・大田みどり・井上サカエ

II 位置と環境

山田市は福岡県のほぼ中央部にあり、田川市、飯塚市の南端に位置し、三方を三太谷山、鞍が谷山、そして東南に熊山の山々に囲まれている。市の中央部には能畑より発する山田川が蛇行しながら北西に貫流し、遠賀川の一水源となっており、それに沿って国鉄上山田線、県道能ヶ畑・上山田線が走っている。

^(註1)
嘉穂郡誌によれば

『熊田村は郡の東南端に位し、南北に長く、東西に短し、東西一里半、南北二里餘にして、全面は三方里あり』。

と記されているように狭地に僅かに開かれた繁華の地を物語っており、交通不便な山村で四周に山を繞らす袋小路的な土地とされている。本遺跡は熊山から平野部に微高地が形成される先端部に位置している。

周辺で知られる遺跡としては、南方に真宗西本願寺末の長教寺があり、この寺の開基は肥前国平島の出とされている平島七郎左衛門明善であり、文明10年^(註2)（1478）の建立である。さらにその付近では、長原遺跡・広畑遺跡など弥生時代の散布地が知られている。本跡の東方にはこの地より後世になって移建したと伝承されている大行事社があり、地の字名を「政所」といい現在は山の平坦地に礎石が残っていて、平安時代弘仁13年^(註3)（822）に彦山靈山寺法蓮上人が創立したと云われている。また愛宕神社、貴船神社なども隣接し建立している。北方では、室町時代永禄戊子年^(註4)（1588）に創立されたと考えられている聖母宮があり、その東北方には、これまでに唯一発掘調査を行った、「古高取山田窯跡」^(註5)（昭和43年調査）がある。縄文・弥生・古墳等の数少ない遺跡のなかで下山田に存在する下ノ谷横穴群は金環・須恵器などを出土した古墳として知られる。それより南方には暦応2年^(註6)（1339）建立の安国寺が存在し、現在県指定文化財になっている。

このように本遺跡周辺は平安時代から室町・江戸時代に続いて神社・寺院・城跡などが周囲の山麓から派生した低丘陵に存在していることが判る。

これらの遺跡についても、今後の調査の進展によって山田市の文化財をより深く理解できる可能性を秘めているよう。

註1. 「嘉穂郡誌」昭和47年。

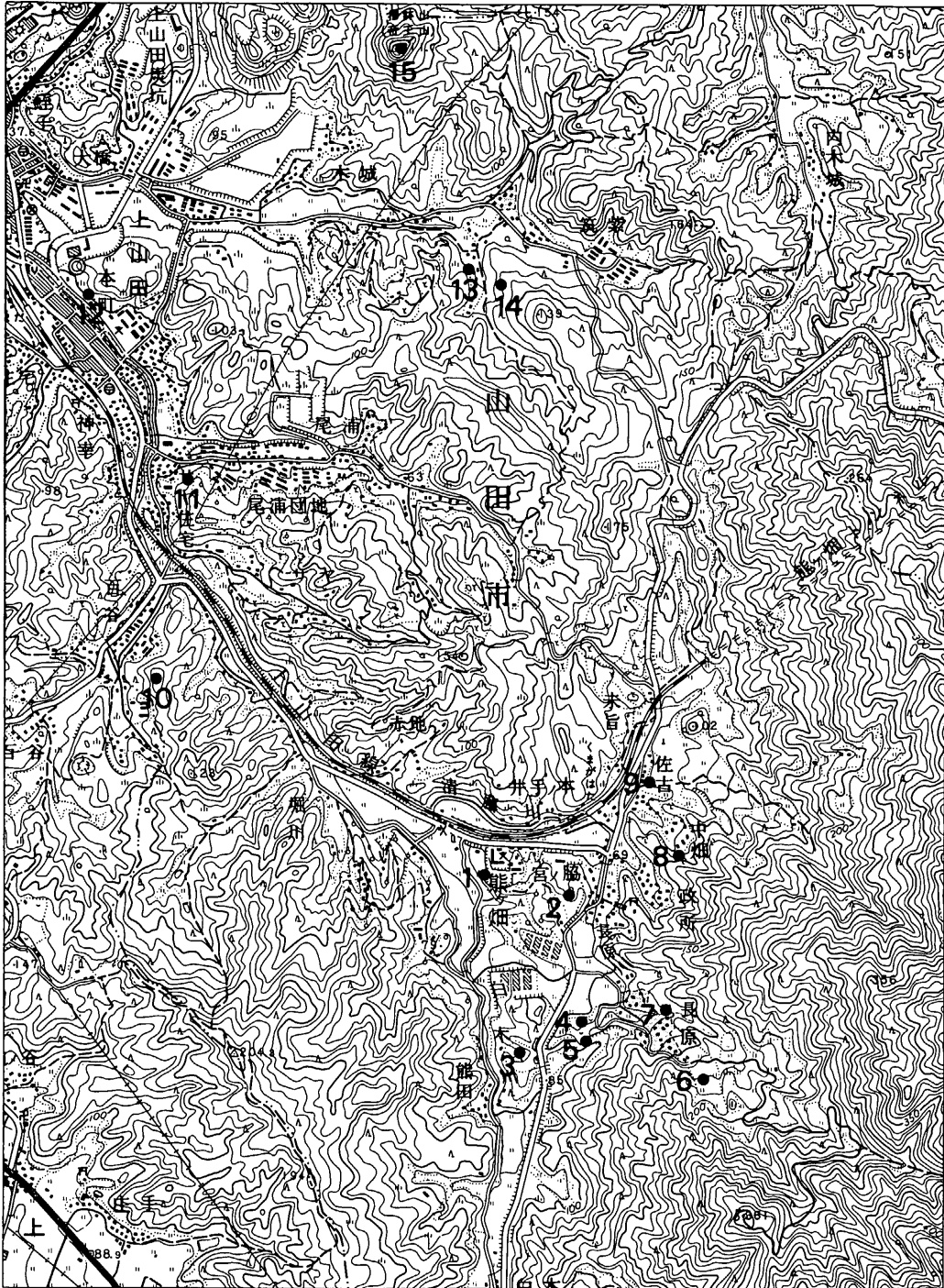
2. 註1に同じ。

3. 註1に同じ。

4. 註1に同じ。

5. 註1に同じ。

6. 註1に同じ。



1. 宮の脇廃寺(神宮寺) 2. 大行寺社 3. 天満宮 4. 長原経塚 5. 長原遺跡
 6. 広畑遺跡 7. 長教寺 8. 愛宕神社 9. 貴船神社 10. 為朝岩 11. 聖母宮
 12. 貴船神社 13. 大庭源太夫・夫婦の墓 14. 古高取山田窯跡 15. 大王山城跡

第1図 宮の脇廃寺周辺遺跡分布図(国土地理院2万5千分の一)

III 調査の経過

調査は標高約81.50mの比較的平坦地になっている約260㎡について行った。調査地の東方は現在熊ヶ畑小学校が存在しているが、小学校建設以前は平坦地が若干続いていたらしく土器・瓦等が散布していたらしい。また南・西方は急傾斜地となっている。さらに北方は戦前まで礎石らしいものが散在し、土壇らしきものがあったという地元民の話であった。したがって今回はそれらの話を手掛りとして最も残存状態が良好であろうと考えた基壇状部分の建物等を検出することを主な目的とした。

調査は昭和59年11月12日に開始した。調査地には樹令27年の桧が有り、その根株を除去するために、作業が思うように進まなかったが、11月16日表土除去を終了した。表土直下は黄褐色土の遺構面で、当初懸案とされていた礎石、側石等の保存状態は悪く、南側 $\frac{1}{4}$ は大きく削除されていた。結局、遺構検出が終了したのは11月22日である。その後、基壇の南側（Aトレンチ）、北側（B・C・Dトレンチ）にトレンチを設定し発掘調査した。各トレンチからは顕著な遺構は検出されなかった。11月27日以降は写真撮影・実測図の作成にあたり、12月7日埋戻し作業を完了した。

IV 検出遺構

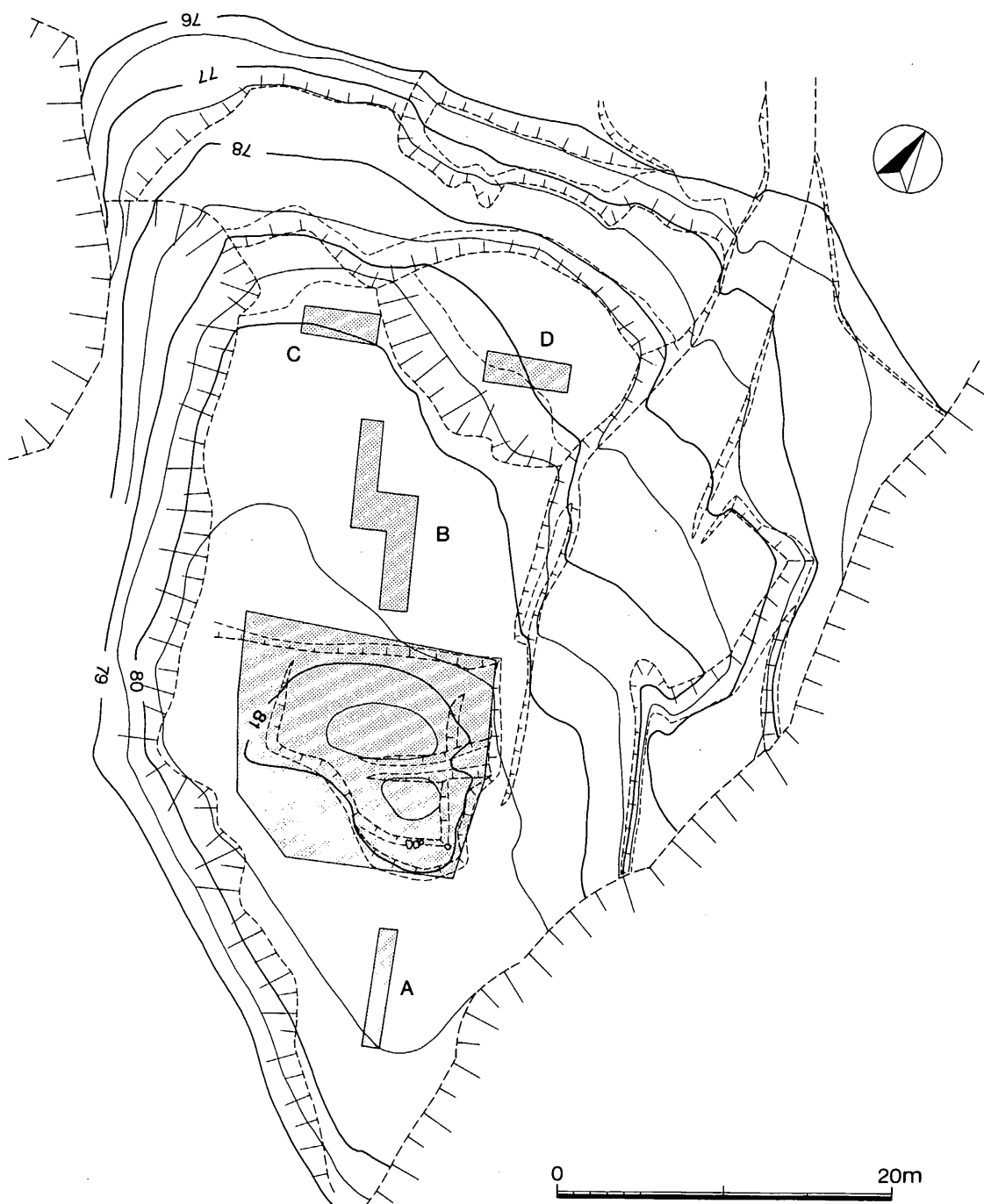
今回の調査で検出した遺構は基壇礎石建物1棟である。

基壇の東側には側石と考えられる自然石がすでに表土面で確認され、遺構の残存が期待された。表土・褐色土を除去すると黄褐色土の遺構面となり、根石・側石はこの面で検出した。南西部および東側石列中央部付近は後述するように大きく攪乱されていた。

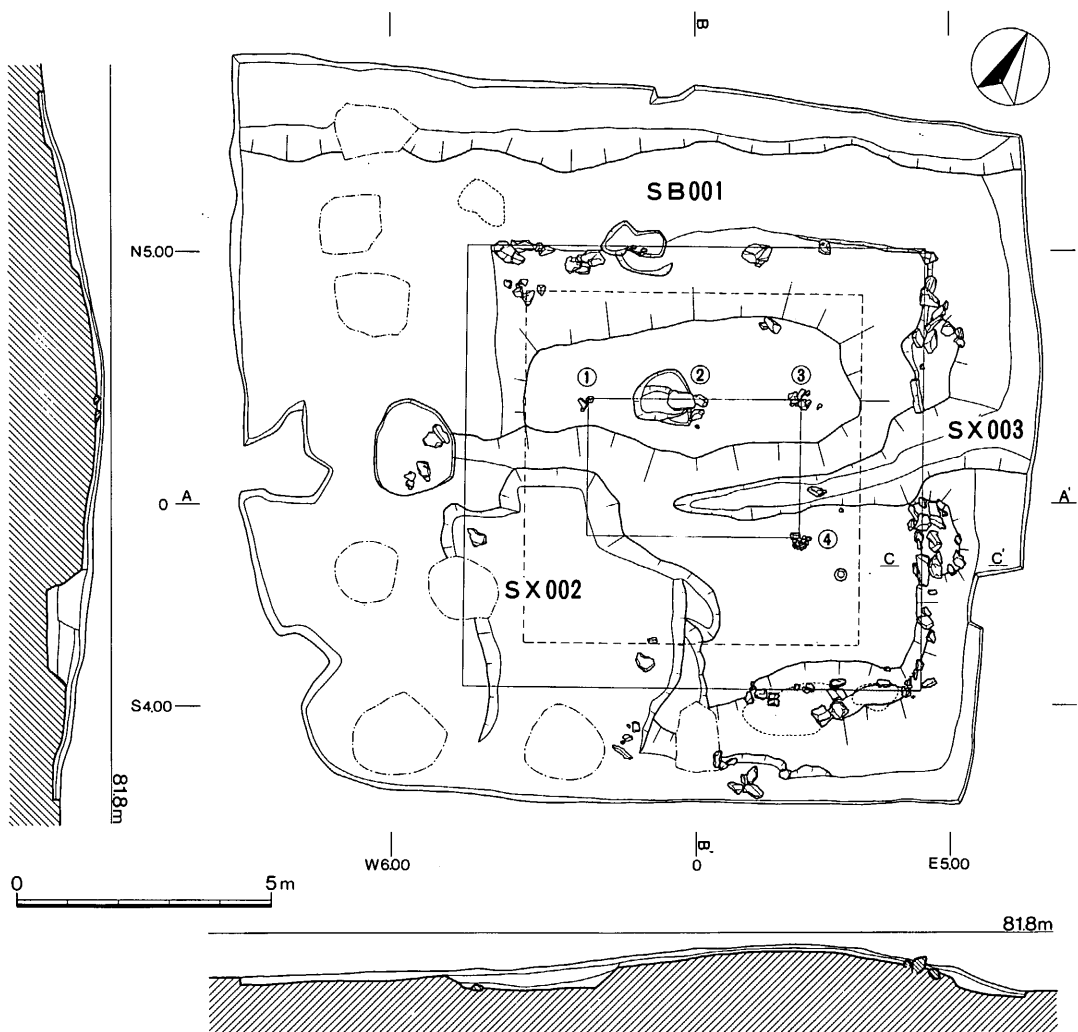
以下検出した遺構について報告する。

1. 基壇礎石建物（第3図、図版2・3）

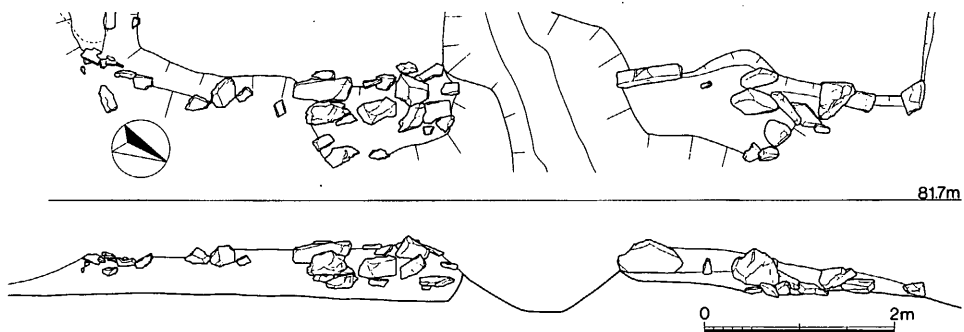
S B 001 検出した基壇側石列は、東側石が比較的良く残存していたが、そのほとんどが原位置を動いており、わずか2個だけが立て据えられていた。南側石は西半分が削除され明らかでないが、瓦の残存状況と数個の石列が認められたこと、また北側は数個の石列と瓦の残存状態などから基壇側石と判断した。西側についてはほとんど残っていない。したがって南側石列と北側石列間は約8.4mである。礎石はすべて抜き取られていたが、礎石位置と考えられる個所に根石痕を4箇所検出した。根石はコブシ大から人頭大の自然石で東西に2間分、南北に1間分を検出し、東西の寸法2.1m（7尺）、南北の寸法2.7m（9尺）である。基壇は版築は認められず、東側石付近で地山から明黄褐色粘質土、黄褐色土を約1.5m積土している。ちなみにその積土は



第2図 宮の脇廃寺地形図およびトレンチ配置図



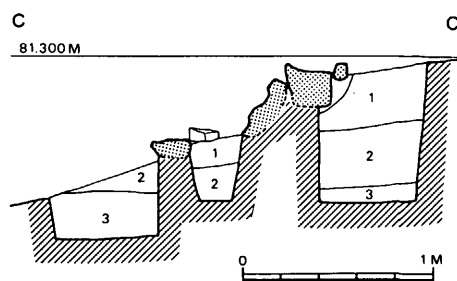
第3図 SB001 実測図



第4図 SB001 東側石列実測図

S X002 でも確認された。

東側石列中央部で、東南隅から約2 mのところに数個の石の配列が認められた。石は原位を動いてはいるものの、基壇積土の明黄褐色粘質土等の上に石が配され、その積土が側石列より張出している点からすると、階段の可能性が充分考えられる（第4・5図）。



第5図 S B001 階段状部断面図

基壇面には炭化物が全域に認められ、北西隅および西端部には焼土を確認した。さらに側石の半数以上は全て赤褐色に焼けていることからこの建物は火災により焼失したものと考えられる。

2. 不明遺構

S X002 S B001 の西南部約 $\frac{1}{4}$ を大きく削除している。そこから出土した遺物は土師器、丸・平瓦片であるが、後述するように土師器は12世紀代のもので、この頃に掘り込まれたものであろう。

S X003 S B001 の中央部で東西検出した溝である。近世に掘削されたらしく、瓦類が集積されていた。

この他基壇礎石建物を中心に南・北側の平坦地にトレンチ4本を設定し発掘調査したが、Bトレンチは戦後畑地として使用しており、他のA・C・Dトレンチは表土直下は地山（小礫混りの明黄茶色土）で、S B001 に関連する遺構は検出できなかった。

V 出土遺物

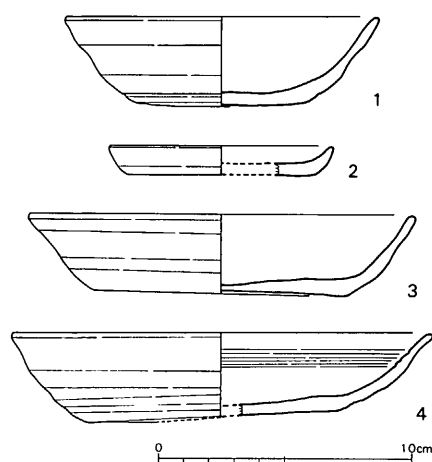
今回の調査で出土した遺物は須恵器片、土師器・釘と多くの瓦類である。これらは主にS B001 建物の側石列外の遺構面直上およびそれを覆う黄褐色土・表土から出土した。ここでは昭和58年11月に予備調査した際に発見された軒瓦と山田市在住の伊藤文夫氏、舟越光雄氏所蔵の瓦類を合せて報告することとする。

1. 出土土器

表土および遺構面上から出土した土器は非常に少い。しかも、そのほとんどが細片化し、復原不可能に近い。さらに、S B001 にともなうと考えられる遺物は皆無に等しく、図示した杯（1）と二段構成の須恵器壺の残片だけである。

表土出土土器（第6図1、図版7）

杯（1）口径12.4cm、器高3.5cm、底径6.8cmに復原できる。体部最下位に成形時に生じた1条の沈線を伴う。底部はヘラ切り離しのままで未調整、若干還元されて淡黄灰色を呈し、一見



第6図 表土・S X002 出土土器実測図

4は若干古様を示すが、2・3は12世紀中頃から後半代に位置付けて大過ないと考えられる。

2. 瓦 類

出土した瓦類は多くの丸・平瓦と軒丸瓦7点、軒平瓦1点である。丸・平瓦の大部分は後世の攪乱によりS X003の東側に集積され、パンコンテナ箱にして約78箱分ある。

軒丸瓦（第7図1～9、図版7）

出土したもの収集されたものを含めて計12点ある。完存する軒丸瓦は無く、比較的保存の良いものを観察すると、中房は径6.3cmで若干歪んでおり3+7の蓮子を配する。蓮弁は中房よりわずかに高く複弁八弁蓮華文で、子葉の盛上りが大きい。間弁はバチ形をなす。外区内縁は蓮弁に接するように珠文が配されており、図上復原すると16個となる。外区内縁と外縁は幅約0.5cmの溝で界され、外縁は約1.0cm前後の低い素縁である。瓦当と丸瓦の接合位置は弁区付近にあり、丸瓦凸面に支持土が多く充てがわれている。いわゆるサシコミ式の技法である。瓦当裏面は丁寧にナデ調整を行っている。

出土した軒丸瓦の瓦当厚は2.0～2.5cmぐらいで、大宰府出土のものと比較すると若干薄い。そのうち6点は瓦当厚が半分に割られたような状態を観察できる。このことは当初范型に粘土を詰め、二度目に粘土を充てがったと考えられ、粘土板と板の剥離面と思われる。胎土には大粒の砂粒を若干含み、淡茶灰色で焼成は比較的硬質である。1・2は伊藤文夫氏所蔵、3～5は山田市教育委員会所蔵である。

軒平瓦（第7図10、図版7）

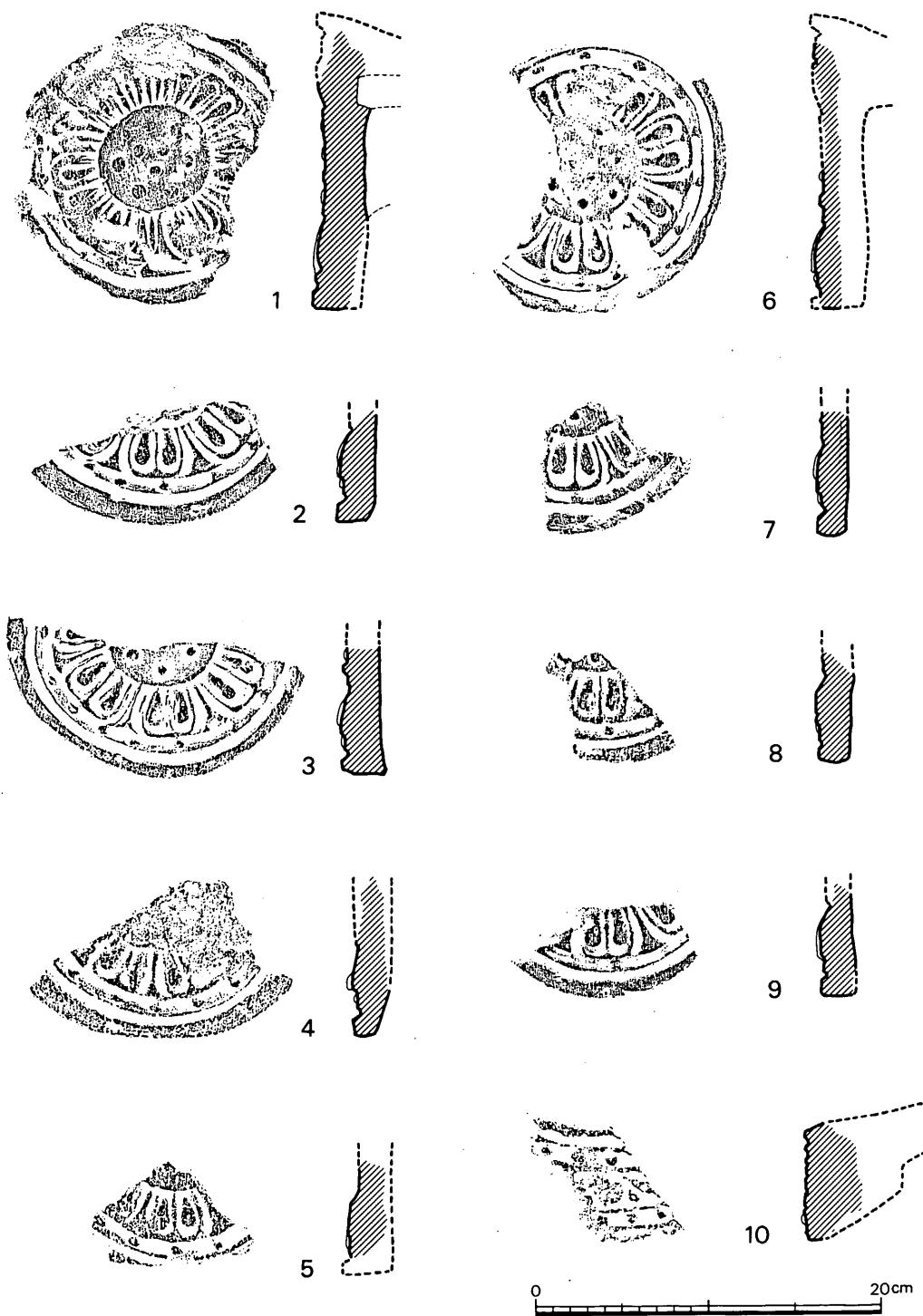
表土から1点出土した。この他軒平瓦の発見例はない。小片で文様の全形を知ることはでき

須恵器かと思われそうな焼成であるが、形態的には土師器である。土師器として誤りなければ9世紀中頃に位置付けられよう。

S X002 出土土器（第6図、図版7）

小皿（2）口径9.0cm、器高1.1cm、底径7.5cmに復原できる土師器小皿の残片である。底部には糸切り離し痕が明瞭に残っている。

杯（3・4）3は口径15.3cm、器高3.1cm、底径10.1cmである。内外面ともに摩滅が著しく調整は明らかでない。4は口径16.6cm、器高3.4cm、底径10.0cmに復原できるが、相当歪なため法量については若干正確さを欠く、体部は丸味を有し、口縁部は若干外彎



第7図 軒丸・軒平瓦拓影実測図

ないが、内区は唐草文と考えられる。上外区、下外区は珠文を配し、下外区の珠文間隔は1.5cmに対し、上外区は1.8～2.0cmで間隔が若干広い。顎は明らかでない。胎土に大粒の砂粒を含み、暗灰色で焼成は硬質である。

熨斗瓦（第9図11、図版8）

表土から1点出土した。現存長約21cm、厚さ3.5cm、中央部で幅13cmである。凹面は荒い布目痕が残り、凸面は縄目の叩きを擦消している。胎土に大粒の砂粒を含み、焼成はやや軟質で、黄褐色である。

丸・平瓦（第8・9図、図版8）

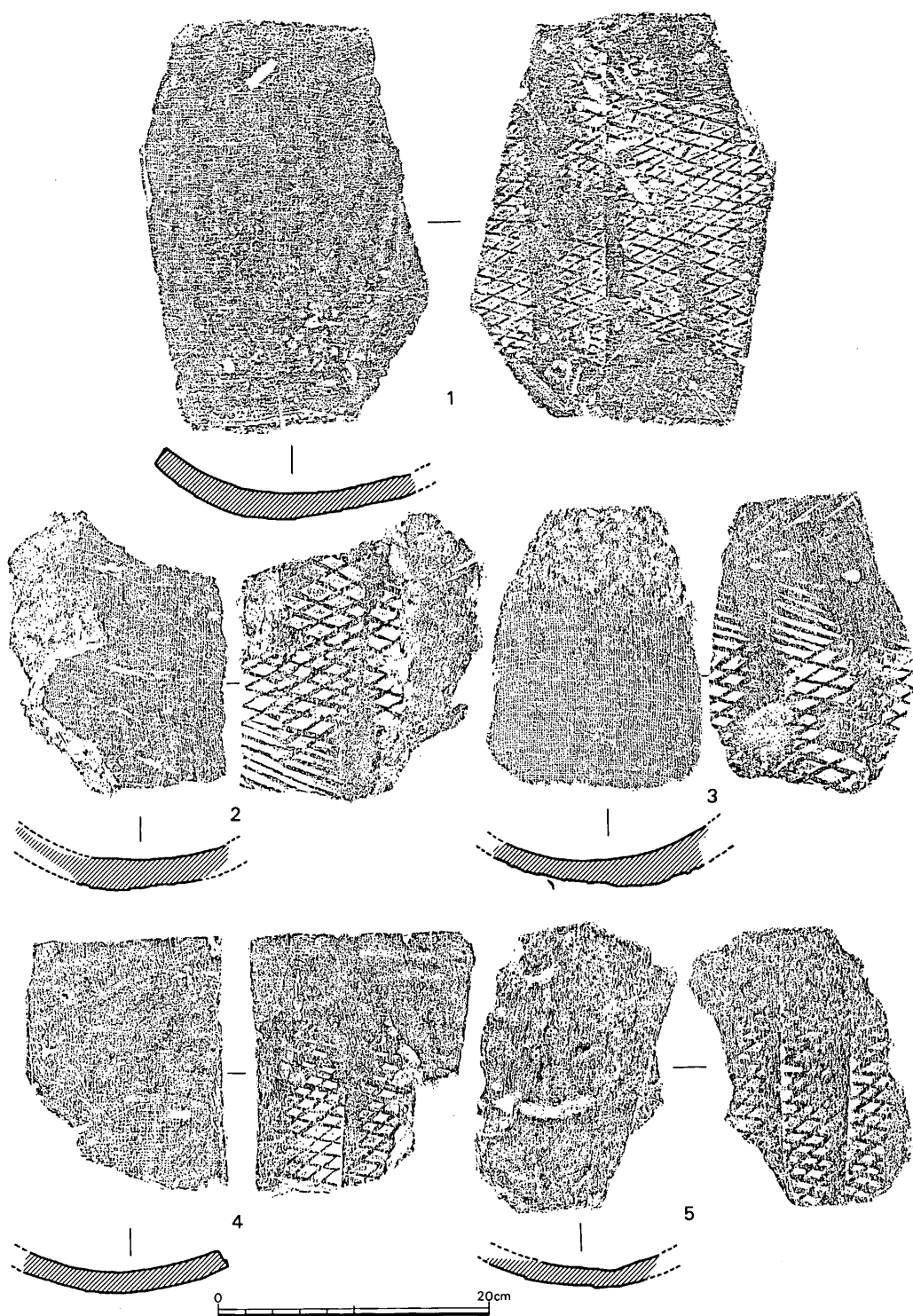
出土した丸・平瓦には凸面の叩きが斜格子目で、第8・9図に示す如く2種類に分類できる。

平瓦（1～8）は完存する例はない。斜格子目の叩きは2・3が大小不揃いではあるが1.5cm（長辺）×1.2cm（短辺）で、端部は平行線の叩きである。1・4～8は前者に比較して斜格子目が小さく細くなり、1.0cm（長辺）×0.9cm（短辺）である。このうち1は叩き板の幅が明瞭に残っており、幅5.4cm～5.6cm、長さ約23cmに復原できる。凹面は2・3が細かい布目痕を有するが、その他は糸目が通らず布目が若干荒い。これらは粘土板による桶巻き造りで、両側縁は分割時のままのものがほとんどである。出土した平瓦の大部分は茶褐色で、焼成は軟質のものと硬質のものがある。1は舟越光雄氏所蔵。

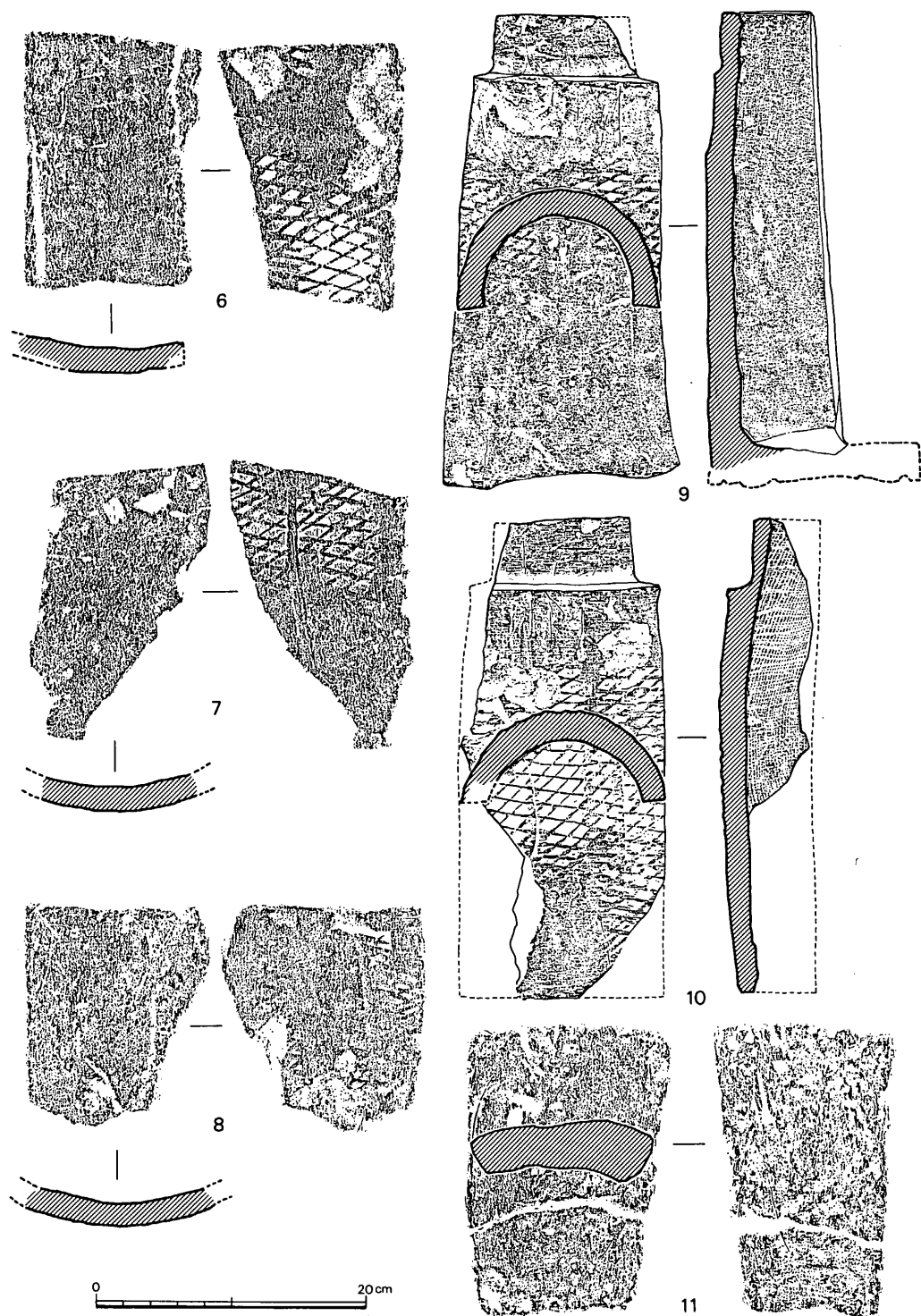
丸瓦（9・10）は玉縁を有するものがほとんどである。それらは全て粘土板巻きつけによる技法で、凸面には平瓦の1・4～8の斜格子目の叩きと同じ叩きが施されている。9は軒丸瓦であるが、軒先端部は欠損し明らかでない。9・10ともに全長約34cmを測り、凹面は比較的荒い布目痕が残り、両端部を丁寧にヘラ削り調整しているものとそうでないものがある。両側縁は分割時のままのものがほとんどである。9は舟越氏所蔵。

3. その他の遺物

釘 SB001 建物の黄褐色土から出土した。検出時は若干残りが良好と思われたが、腐蝕が著しく実測に耐えるものでなくここでは割愛する。釘は角釘で一辺約0.8cmのものである。



第8図 平瓦拓影・実測図



第9图 平瓦·丸瓦·斗瓦拓影·实测图

VI まとめ

宮の脇廃寺については基壇らしき高まりと、その周囲から古瓦が発見されることなどから早くから知られてきたが、これまで十分な調査は行なわれなかった。地元民の話では東方に位置する大行寺社の前身社としての伝承を保っており、そのようなことから今回の調査に期待された。しかしながら調査結果は予想を大きく裏切り、基壇側石列と根石群を数箇所検出したにすぎない。側石列も後世の攪乱が著しい状況であり、西側は全く検出できない結果であった。ここではこれらの調査結果をもとに若干の私見を述べまとめとしたい。

先ず S B 001 建物（第 3 図）の基壇側石を検討すると南北側石幅は若干の出入りはあるにせよ約 8.4m（28 尺）である。また基壇上に 4 箇所検出した根石（①～④）は東西 2.1m（7 尺）等間、南北 2.7m（9 尺）である。この数値を手掛りとして東側石列と根石列（③・④）との距離は 2.4m（8 尺）で、さらに東西根石列（①～③）と北側石列は 3.0m となり、これは根石④と南側石列との距離と合致する。検出した根石は南北 1 間×東西 2 間以上で、廂部分については、根石はなく、かろうじて北西隅部にその一部と考えられる石が残っていたが、柱位置を示すかどうかは明らかでない。これらのことから仮りに根石②と根石④から 2.1m を西方へ取った点とを線で結び（中心線とする）、これを西に折り返すと、中心線から北西隅部まで約 3.3m に復原でき、先の根石の一部と考えた点にあたる。この数値を東方に求めると、東側石列と根石③と④を結んだ間の丁度中心に位置し、東側石列と根石③・④との距離は、約 1.2m（4 尺）等間となり数値上うまくいく。このように考えると S B 001 は身舎部分は東西 2 間×南北 3 間で、柱間は東西 7 尺等間、南北は 7・9・7 尺と推定でき東西に廂のついた、切妻造りの建物が復原できる。また階段と考えた東側石列の張出し部は、東南隅から約 2.0m の石を耳石とするには今一資料に欠けるものの、基壇積土などから階段としてさしつかえないと思われる、因に本跡建物の正面は東面するものと考えられる。しかし根石がわずか 4 箇所しか検出されず、建物を復原する手掛りは皆無に近いと、この数値の求め方に強引さは否めない。基壇および建物はさらに西方に延びる可能性がある。

次に瓦類についてみると多量の丸・平瓦片をのぞいた他は軒丸瓦 1 型式、軒平瓦 1 型式である。しかも軒平瓦は小片で文様全体を明らかにするには困難であり、1 点のみという数から考えると両者をセット関係とするには資料不足の感がある。軒丸瓦は中房が大きく、蓮弁の盛り上がりおよび返りは、奈良藤原宮出土の複弁八弁蓮華文軒丸瓦や、川原寺の軒丸瓦に類しており、大宰府では老司式軒丸瓦に似ている。さらに瓦当と丸瓦の接合位置、瓦当裏面の調整等は奈良時代の特徴を強く導き出している。しかしながら瓦当全体は規格性に欠け不均整であり、丸瓦凸面は斜格子目の叩きおよび粘土板技法による製作で、両側縁は分割時のままであるというテ

クニックは、大宰府政庁跡出土瓦の平安時代に見られる特徴を示している。このようなことから本跡出土瓦の年代を考えるに一末の不安はあるが、9世紀前半代頃に想定して大過ないと考えられる。因に数少ない出土土師器の時期とうまく符合することからも裏付けできよう。

宮の脇廃寺の東方に位置する大行事社は嘉穂郡誌によると

(前略) 干時嵯峨天皇弘仁十三年、彦山^(註1)靈山寺法蓮上人、奉詔修法靈驗殊顕仍蒙寺領七里十方檀那勅許於是法嗣第四世座主、(中略) 於三国豊筑境四十八箇所、大行事社為産土鎮守神、奉勤請其創立之一社也云云、(後略)

とあり弘仁13年(822)に大行事社が創立されたことが記されている。従来ともすれば大行事社が本跡にあったと云う伝承は、弘仁13年の記事と本跡出土土器および瓦類と年代的に符合する点はかくしきれないことである。したがって本跡の存続年代は出土した土師器、瓦類などから9世紀前半頃から12世紀頃にかけて存在したものと考えられる。

註1. 「嘉穂郡誌」昭和47年

Ⅶ 付編 — 古代嘉麻地方と山田市所在の宮の脇廃寺について —

宮の脇廃寺は山田市大字熊ヶ畑字宮ノ脇に所在する古代寺跡と考えられる。これより宮の脇廃寺の地理環境及び歴史的背景と同時に古代における嘉麻郡山田についての所見を述べてゆく。

山田とその周囲についての古代を認識するには、当地に関する考古・文献資料の乏しいことにより、地形に表出した古代の痕跡により成さなければならない。つまり条里及び交通路による古代嘉麻地域の復原である。

文献での嘉麻郡の初見は『日本書紀』安閑二（535）年に「筑紫の穂波の屯倉、鎌の屯倉を置く」と記載された「鎌」＝嘉麻である。と同時に「穂波」^(註1)の初見もある。この記載により嘉麻と穂波が当時より密接な関係を有していたことが窺える。また当時相方の郡（屯倉）名が農耕に関わる名称であることから、当地において古来より農耕が盛んであったことが推察される。そして嘉麻郡には遠賀川を本流として庄内川・鹿毛馬川・山田川・千手川の4支流があり、それらの河川によって形成された肥沃な土地を有している。嘉麻郡における条里施行地は、遠賀川と穂波川の合流地を中心として、嘉麻・穂波の両郡に跨り南北3km、東西2.5kmの飯塚条里や、遠賀川と山田川の合流地より遠賀川西岸に沿って北に2.5km、幅約0.4kmの範囲の山野条里、同じく遠賀川・山田川の合流点より山田川東岸に沿って南に0.6km、幅0.1kmの中ノ坪条里、さらに中ノ坪条里より山田川を約1.5km溯り、南北1km、幅0.4kmの条里田の条里などが推定されている。^(註2)そして嘉麻郡には、大宰府と豊前を結ぶ官道、通称「田河道」が通っていた。当郡内には『延喜式』に記載されている綱別駅が知られており、当駅家は現在の庄内町綱分もしくは、同町有井に推定されている。^(註3)

このように嘉麻郡における条里及び官道は、郡内の中央部か、もしくは北寄りの地形が緩慢なところに形成されており、南側の遠賀川とその支流の上流山間部では、古代の遺跡はほぼ皆無といってよいほど確認されていなかった。しかし、今回発掘調査を行なった宮の脇廃寺は、山田川の源流に近い丘陵上に位置している。

山田の地形と環境は、東に田川市・川崎町があり、また西の遠賀川を溯り、嘉麻峠を越え南下すれば日田市に通ずる。この様に山田は豊前と接し、豊後とは近隣の地である。地形は東西南を山林に囲まれ、市域のほとんどを山林が占めている。その山間を縫って熊ヶ畑山を源流とする山田川が市の中央部を南北に流れ、それに沿って狹隘な平地を形成している。

このような地で本寺跡が立地しているのは、前述の熊ヶ畑山山麓の狹隘な平地に突出した小高い丘陵上である。また当地にはいにしへの建造物の存在を想起させる様な字名が存しており、寺跡が所在する当地を「宮ノ脇」といい、そしてその周辺に「中ノ坪」・「中馬場」・「政所」という字名が存している。それらは本寺跡の南側で山田川支流の長原川沿いの耕地を「ミヤノウシロ」と称し、東側本丘

陵斜面を「ジングダニ」と称している。そして西側の県道飯塚・山田線上に架る橋に「門ノ元橋」と名づけられていることなどからも、当地に宮、もしくは寺院などの何等かの構成を有した建物が存在したことが窺われる。本寺跡よりの交通路及び景観についてであるが、それは共に悪く交通路は山田川沿いに狭隘な谷を抜け、遠賀川との合流点へ向う路が一本存するのみである。他の現在存している道路は險阻な峠を有しており、古代においてそれらの路が一般の往来に使用されていたとは考え難い。また当寺跡よりの景観は周囲の山々やそれらから派生した丘陵によって遮られている。

このように辺ぴな地に建立した理由を解明してゆかねばならないのではあるが、現在のところそれを論究し得るだけの資料が不足しているので不可能である。しかし地理的な面から、その建立理由を想起させる点について述べてゆく。

本寺跡の存する地は、先述のごとく交通不便で「袋小路」を形成している。本来当地のような所に寺を建立することは考え難い。また古代における寺の建立と運営は容易に成し得るものではなく、ある程度、確かな経済基盤を有していなければならず、一郷単独では出来得ないものである。まして山田の様に山間で耕地面積の少ないところでは、寺経営の基盤を持ち得ないのである。つまり寺の経営は、複数の郷が集合するか、もしくは集合させられて成しえるもの、または郡単位で成しえるものであろう。そして当寺をその点について考察すると、当嘉麻郡における最小経営単位として、山田川沿岸の郷によるものが考えられる。これにおいては同時に山田川とそれより出ずる水を専有している郷を意味する。しかし、山田川沿岸では条里推定面積が狭く、他に耕地の存在は極僅かであると察せられ、当寺の経営は不可能であろう。また周辺の他の郷との集合においても困難であろう。すなわち当寺の経営基盤としては嘉麻郡全体でなければ出来ないと推察される。また嘉麻郡において当寺建立者としては、当地の豪族「財部氏」^(註4)が考えられる。しかし、当地における財部氏の記録も乏しく、寺院建立を行なったか、否かは定かではない。

以上のごとく、すべて推測の域を脱し得ないことを述べてきたが、今後本稿で述べてきた推察をより立証的に究明し、当寺跡を取囲む嘉麻郡の古代を復原してゆかなければならない。

註1. 嘉麻・穂波は隣接した郡で明治29年に両郡が合併し嘉穂郡となっている。

註2. 『福岡県遺跡等分布地図』(1780)福岡県教育委員会編を参照した。しかし、他に条里の痕跡を有する所が存していると考えられるが、今回著者の踏査の不十分さにより割愛する。

註3. 吉田東伍『大日本地名辞書』(1977)、高橋誠一「筑前国」『古代日本の交通路・Ⅳ』大明堂(1979)の各々の説による。

註4. 『続日本紀』宝亀元(770)年の条に「筑前国嘉麻郡人財部宇代」の記載があり、貞観十一(869)年の田文所〔『平安遺文』蜂須賀家所蔵文書所収〕に「財部貞雄」の記載が見られ、ともに嘉麻郡在住の人物である。

版 図



宮の脇鹿寺遠景(東から)



礎石建物 S B 001 全景(北東から)



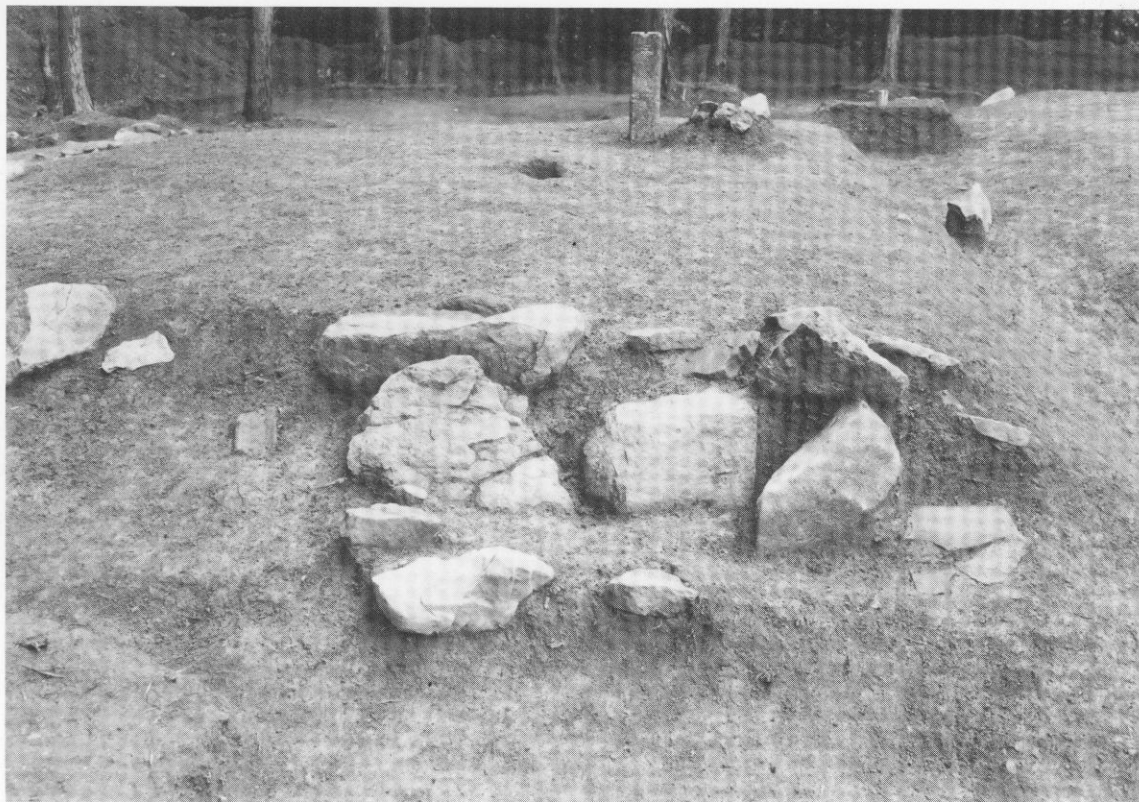
礎石建物 S B 001 全景(北から)



S B 001 根石と東側石列(北から)



S B 001 東側石列
(南から)



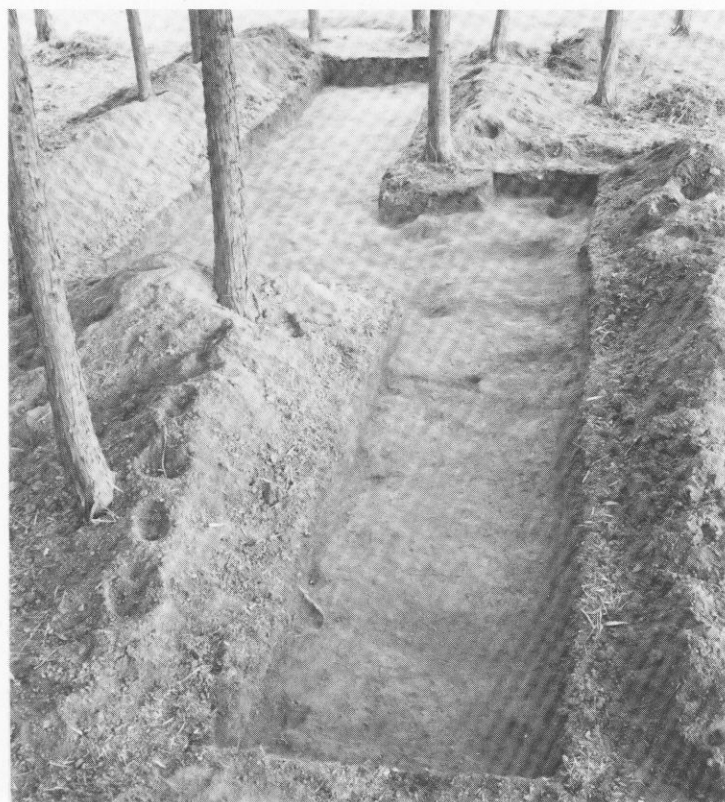
S B 001 1 階段状遺構(東から)



S B 001 階段状遺構(北から)



Aトレンチ
(南から)



Bトレンチ
(北から)



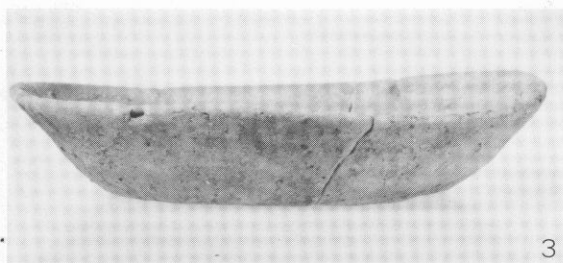
Cトレンチ
(東から)



Dトレンチ
(西から)



1



3



2



4



1



6



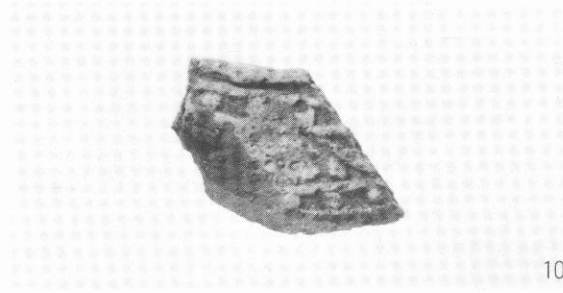
2



9

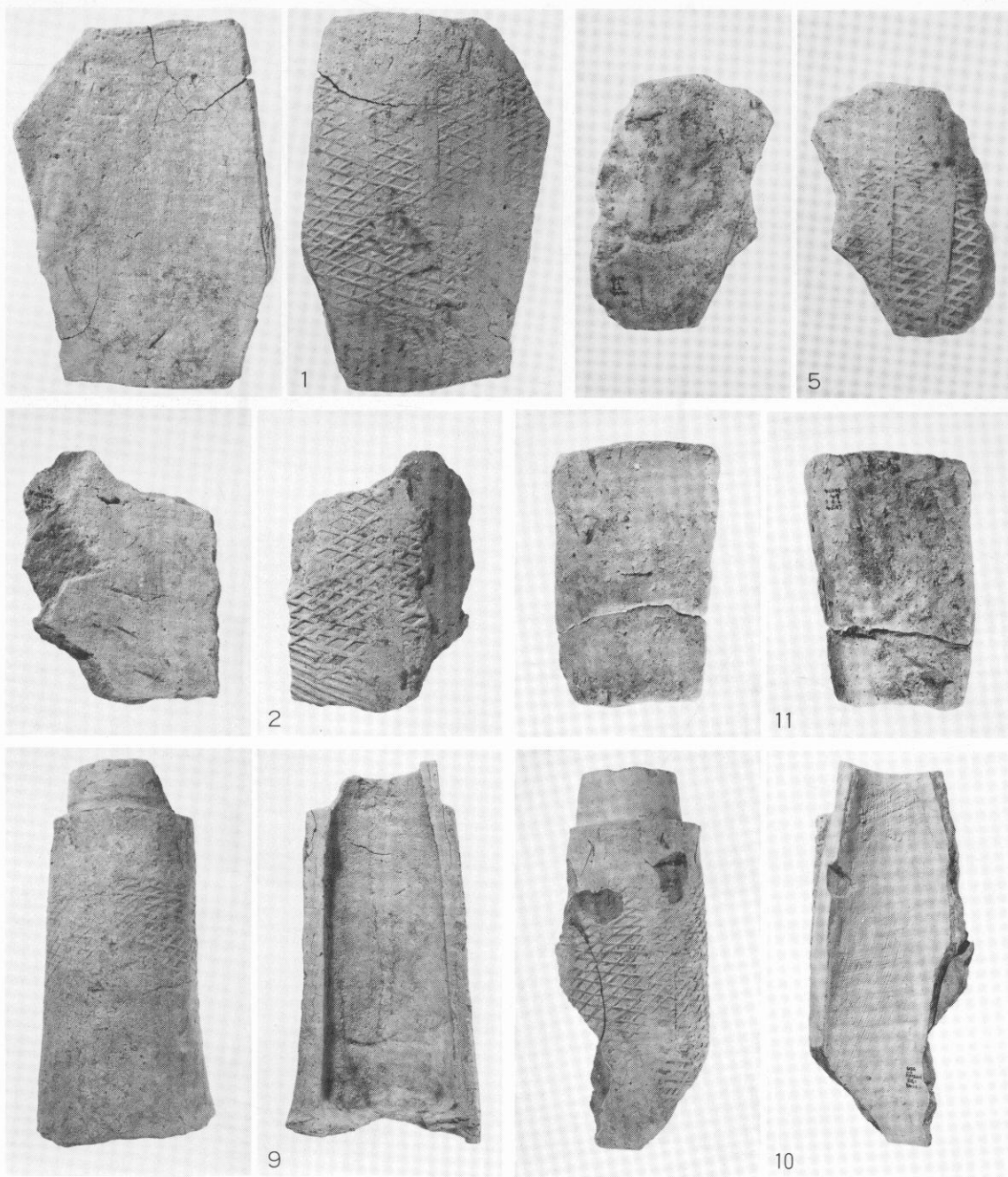


3



10

S B 001 出土土器・軒先瓦・軒丸瓦 (1・2は伊藤文夫氏蔵)
(3は山田市教育委員会蔵)



S B 001 出土丸・平瓦・熨斗瓦(1・9は舟越光雄氏蔵)

宮の脇廃寺

山田市文化財調査報告書

第 1 集

昭和 60 年 3 月 30 日

発行 山 田 市 教 育 委 員 会

山田市上山田 3 9 2

印刷 正 光 印 刷 株 式 会 社

福岡市西区徳永 8 7 7